神の国の到来とクリスマス

奨励	三木 メイ [みき・めい]
奨励者紹介	同志社大学キリスト教文化センター助教
研究テーマ	キリスト教の実践神学（女性学、人間関係、教会）

その地方で羊飼いたちが野宿をしなが、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。

「いと高きところには栄光、神にあり、地には平和、御心に適う人にあれ。」

(ルカによる福音書 2章8-14節)

ファリサイ派の人々が、神の国はいつ来るのかと尋ねたので、イエスは答えて言われた。「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」

(ルカによる福音書 17章20-21節)

クリスマスを迎える意味

だんだんとクリスマスが近づいてきました。今日はアドベントの2週目ですから、アドベント・クラウンツの蠟燭に2本だけ火を灯しています。京田辺キャンパスでは先週クリスマス・イルミネーションも点灯を始めました。今週は、キリスト教文化センター学生スタッフ企画のクリスマス・リース作りのワークショップを両校地で4回行います。今日もこのチャペル・アワーの後で行う予定です。クリスマスを迎える準備がいろいろと始まっています。

「クリスマス」というと、日本の社会ではキリスト教とはほとんど関係なく、年末の非日常的なイベントとしてさまざまな形で楽しむ、サンタさんのお祭りになってしまっています。そして、隠れサンタさんたちのために、デパートやいろいろなお店が「クリスマス・セール」をしていて賑やかです。その一方で、何かの理由で賑やかにクリスマスを過ごせない人たちが、一緒に過ごす恋人がいない人は何となく切なく寂しい想いをする時期でもあります。でも、本来のクリスマスやアドベントはそういうものではありません。

「クリスマス」は、誰でも知っているでしょうが、その本当の意味を知らない人が多いです。私は、クラスの受講生の書いたコメントから毎年それを知ることになります。今年私が驚かされたコメントの一つは、「他の宗教にも、クリスマスってあるのですか?」という質問です。何を問われているのかわからなくて面食らいました。

他の宗教の人がクリスマスを楽しむことは全く問題ないと私は思いますが、「クリスマス」は、Jesus (イエス) をChrist (キリスト) と信じるからChristmas (クリスマス) なのです。その「クリスマス」がないのは当然です。でも、日本ではそういうことすら、学ぶ機会が少ないのだなあと思わされるので、私は毎年「クリスマス」と「アドベント」の意味の説明を授業でしています。

「クリスマス」と

「アドベント」

さて、今日のお話のテーマは、「神の国の到来とクリスマス」。

「クリスマス」は、イエス・キリストのご降誕に感謝する日で、それは知っているという人も多いでしょう。ところが、「神の国の到来」というと何のことかわからないのではないでしょうか。でも、この二つの言葉は、実はほとんど同じことを表している表現とも言えるのです。クリスマスを迎える前の期節を「アドベント」と言いますが、この言葉は、「到来」「やってくる」「近づいてくる」という意味です。「神の国」という言葉は、イエスが生きていた時代のユダヤの人びとがさまざまな意味で使っていました。ユダヤ教徒たちは、旧約聖書において神様がアブラハムとその子孫に約束してくださった救いの契約が果たされる日が来るのを、いつかいつかずっと待ち望んでいました。そして、だんだんとそれは、この世の終わりに神様が救いを完成される時が来た時に「神の国」が現れて、神様がそこに入る人とそうでない人を分ける最後の審判をなさるのだろう、という「終末信仰」になっていきました。ですから、神の国がやって来る、ということは、自分のそれまでの生き方を神様によって裁かれる日でもあるので、喜んでばかりはいられないのです。なおかつ当時は、神の国は目に見える形でやって来ると信じていた人が多くいたようです。そして、世の終わりが来る前に、神様は救い主・メシアを私たちのところに派遣してくださいに違いない、という「メシア信仰」も現れてきました。

イエスが語った「神の国」

今学期の統一テーマの「実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」という言葉は、イエスが「神の国」の本当の意味を人びとに知らせるために語ったものです。この言葉の前に「神の国は、見える形では来ない。」(ルカによる福音書17章20節より)とはっきり言われています。人間は、どうしても目に見えるものに興味をもちます。そして、目に見えないことは、大事なことで忘れてしまいがちになります。そして「神の国はあなたがたの間にあるのだ。」(17章21節より)というこの言葉。これは、人と人との関係性のなかにあるのだ、という意味でもあるし、またメシアであるイエスがあなたがたのところに来ているから、すでに神の国はあるのだ、ともとれる言葉になっています。ただ、それは単に喜ばしい知らせだけではなく、この言葉の後では、イエスがまもなく起こってくる苦難の予告を語っています。

新約聖書にたくさん書かれている「神の国」のたとえ話について、秋学期の私のクラスで紹介しているのですが、ほとんどのたとえ話に「神の愛」と「隣人愛」についてのメッセージが込められています。ですから、イエスは、これまでの預言者たちのように「神の裁き」を恐れなさい、と伝えることよりも、「神の愛」と「隣人愛」を大切にしよう語っています。神の愛を自ら実践しながら人びとに教え、それを悟った人間同士の間で「隣人愛」を実践していく、そのような愛による関係性が実現するところに、「神の国」はある、と伝えられたのではないのでしょうか。

「愛」は人の内面の奥深くでの出来事ですから、目には見えません。そして、具体的な功績とはなりません。しかし、それが人間の間に「ある」ことがどれだけ大切なことなのか、イエスが命をかけて、自分の生涯の生と死を通して伝えようとしたのは、そのことなのです。

「神の国」が何を意味するのか、それはイエスの教えによって、以前とは異なる新たな意味をもつようになり、そしてそれが本当の神の御心を示す真理だと人びとに信じられるようになっていきました。ですから、イエス・キリストがこの世に誕生したクリスマスは、私たちが真実の意味での「神の愛」、「神の国の到来」を知らされる最初の喜ばしい出来事なのです。

クリスマスの物語

長いキリスト教の歴史のなかで、このクリスマスを題材にしたさまざまな文学作品が作られました。今日一つご紹介します。なんとという題名か、もし知っていたら当ててください。

その物語の書き出しはこうです。「一ドル八十七セント。それだけだ。しかも、そのうち六十セントは一セント銅貨である。」

とても貧しい若い夫婦がクリスマスを迎えたときの物語です。貧しい二人にとっての宝物はたった二つ。妻デラの髻色の長く美しい髪、そして夫のジムが父親から譲り受けた立派な金時計です。そして、デラは日常のごく小さなことでも無言の短い祈りを唱える癖がありました。彼らはお互いのクリスマス・プレゼントを買うお金がなかったのです。でも何とか相手を喜ばせたかった。それで、デラはさんざん悩んだあげく、自分の長い髪の毛を髪結い屋に売って、夫の金時計につける素敵な鎖を買いました。一方、ジムはデラが以前ショーウィンドーでじっと見つめていた籠籠(ベッコウ)の高価な飾り櫛を買うために、あの金時計を売ってしまったのです。ですから、妻のプレゼントを知ったときにジムはとても驚くのです。こう言います。「ぼくたちのクリスマス・プレゼントは、片づけて、しばらく、そっとしまっておくことにしよう。いまずぐ使うには、上等すぎるよ。」

分かりましたか。そうです。これはアメリカの作家オー・ヘンリーの『賢者の贈りもの』です(大久保康雄訳『O・ヘンリー短編集(二)』より 新潮社 1966年)。彼は今から151年前の1862年生まれ。ニューヨークで短編小説を連載して大人気を博した作家です。彼は、この物語の最後にこう書いています。

「最後に一言、贈りものをするどんな人たちよりも、この二人こそ最も賢い人たちであったのだと、現代の賢明な人々に向って言うておきたい。贈りものをあげたりもらったりする人々の中で、この二人のような人々こそ最も賢明なのである。どこにしようとも、彼らこそは『賢者』なのだ。彼らこそ東方の賢者なのだ。」

目には見えない「愛」

現実的には、お互い使うことができない贈り物をプレゼントしてしまった結果になったのだから、愚かな二人だと言われても仕方ないのですが、でもそんなことよりももっと大切なのは、目には見えない温かい心、お互いを思いやり、喜ばせたいと思う「愛」なのです。その目には見えないところが、素敵なのです。

実は、オー・ヘンリーは人気作家となる以前の若いころは、かなり職業を転々として貧しい生活をしていました。そして妻と子どももいました。ところが、あるとき彼は横領の疑いをかけられて、裁判所に向かう途中で逃亡してしまいました。彼が逃亡生活を送っていたその間、残された妻は彼を責めることなく、自分で内職の手仕事をして生活していたのですが、からだを壊して死の床についてしまいました。この妻は、髻色の髪をしていて、日常生活で無言の短い祈りをする癖があった。すなわちこの物語の「デラ」はヘンリーの亡くなった妻がモデルらしいのです。危篤の知らせが届いてから、彼は急いで妻のもとに戻りましたが、亡くなってしまったそうです。

私は、この物語はこの亡くなった妻に対する感謝と愛を込めて書かれたのだらうと思います。作家の心に秘めた想い、亡き妻への真実の愛を、目に見える形にした物語です。だからこそ、この物語も世界中の多くの人びとに語り継がれ、多くの人びとの心に刻まれているのだと思います。

主イエス・キリストは、目には見えない神の愛を、目に見える形で分かるように私たちに示してくださいました。私たちの耳にはなかなか聞こえてこない神の声、神からのメッセージを、聖書のイエスを通して、私たちは聞くことができるようになりました。そして、その神の愛を通して、隣人愛の尊さを知り、真実の「神の国」の意味を知ることができるようになったのです。

クリスマスを待ち望むこのアドベントの時、私たちの中に、そして皆さんの隣人との間に、「神の国」はあるでしょうか。それとも、残念ながら、無いのでしょうか。実際には、自分たちの周りでも、日本社会においても、世界においても、まだまだ「神の国」の実現は遠い、と思われる現実があります。でも、だからこそ、主イエス・キリストのご降誕を心に覚えて、目には見えない愛を大切に、本当の愛と平和が実現される、「神の国の到来」を祈り求めていきましょう。

2013年12月11日 京田辺水曜チャペル・アワー
「アドベント讃美礼拝奨励」記録